

目で、経験のある女性何人が申し出て彼等の要求に応じ、一団はなんとか境界線を越えることができた。引揚婦人のためになった彼女達にはなんと御礼をいっていいかわからない。今でも心から感謝の気持で一杯である。

やつとの思いで京城に到着し、米軍はソ連軍と違い、優しく扱ってくれた。もしあと一か月遅かったら、私達は死に追いやられたことは明らかであつたらう。現在思い出しても血の気が失せる思いで、あの地獄絵は私が死ぬまで忘れることのできない苦難の途であつた。一か月かかって、佐世保に入港したのは昭和二十一年六月二十九日であつたが、ボロボロの衣服をまとい、目だけギョロギョロと光らせ、乞食同然の姿で、やつとの思いで生まれ故郷に帰ることができた。

このあと又生活苦が待ち受けていたことを申し添えて後世に当時の辛苦の一端を申し送るものです。

## ハルビンで終戦をむかえて

東京都 舛谷 スエノ

ハルビンは国際都市で、日本人、朝鮮人、ロシア人、満州人が住んでいました。日本人は約五万六千人だつたと思います。

私の家は、マサヤ理髪店といつて、キタイスカヤ街で理髪店を営んでいたので、私たち親子五人と職人二人とボーイ一人でやっていました。

終戦の少し前、夫（三六歳）に現地召集がきたのです。私も日頃から覚悟はしていたものいざ手にした時は、ただぼうぜんとなりました。私は三十一歳でその頃四人目の子供が妊娠五か月になっていました。私達妻子を残して出征する夫もよほど心残りだったでしょう、その夜、長い手紙を書いていました、それを私に書き残してくれました。

六月十七日の朝五時に、私に、子供達を頼む。みな

達者で暮すように、と言葉すくなく言って、最後に三人の子供の寝顔をよく見て出発していききました。

その日から私は子供達の母親として強く生きていかなければと自分に言いきかせて、毎日お店をやっていた。一番困ったのはロシア人のお客さんでした、私も職人もロシア語がわからなかったからです、夫はロシア語が話せたのでよかったです。

それから戦況が激しくなって、二人の職人も、とうとう現地召集がきて出征してしまいました。

長男光昭七歳、長女公子五歳、次男昭洋三歳で、いよいよ母子だけになってしまった。

私は途方にくれました。仕方がないから朝鮮人の職人を一人雇って、ほそほそ店をつづけていました。

間もなく八月十五日に終戦になりました、ところが、終戦になったその日から日本人にはすべての配給が止まってしまうました。お米、石炭など何もかも配給がなくなりました。

一番困ったのは家のことです。白系ユダヤ人の家主は、私が妊娠していることがわかったらしく、お前の

夫とは十年以上も友達だったから今直ぐ出ていけとは言わない、お産をして元気になったら家をあけてくれ、と申しましたので、親子とも助かりました、そのかわり、店はすぐ閉めて、朝鮮人の職人とボーイはすぐ帰ってもらうように、と言われたので、家主の言うとおりに二人を断りました。

こうして、親子四人は四畳半の部屋一つを借りて、出産を待ちました、家主は家賃を一銭もとりませんでしたので助かりました、二か月くらいたった十月三十日に、私は男の子を産みました。負けた国ですから日本人の産院はなく、仕方がないから隣の満州人の靴屋の奥さんに頼んで満州人の産婆さんをよんでもらって、無事お産をしました。

私は、今日から四人の子供の母親として強く生きていかなければ、と思つたものの、働き手一人いるわけなし、七歳の光昭、五歳の公子がうらの物置から石炭を運んできてベチカをたいて部屋を暖めてくれました。

十一月頃、ソ連刑務所の囚人達が大量市内に入って

きて、日本人にいやな思いをさせました。私の家にも三人でガラス戸をこわして入ってきて、私の着物や時計など、何でも手当り次第目ぼしいものを盗っていつてしまいました、私たち親子はこわくて何も言えず、だまって見ているしかないのです。

外地に居住する日本人は、戦争のためにどうしてこんなひどいめに遭わなければならないのだろう、と思ひ、哀れでなりませんでした。

十二月半ばごろ、永年住んだキタイスカヤ街の家をユダヤ人の家主に返して、街はずれの南頑の收容所に移りました。アンペラの上で皆と共同生活です。日増しに食糧難になってきたので、朝五時に起きて近所の餅屋に手伝いにいき、九時に帰ってきて子供達に朝食を食べさせてから、昼はバリカンとハサミをもって、ハルピン市内のあちこちにある收容所に散髪にでかけます、五歳の公子には餅屋から大福もちを十個仕入れてきて板の上にならべて街角で売らせました。一個一円、二割ほどの利益があがったように思います。公子はよく私の手助けをしてくれました。七歳の光昭と三

歳の昭洋は赤坊のお守りをさせて毎日夕方の四時ごろまで散髪をして帰ります。とに角どんなことがあっても親子で日本に引き揚げるまでは、と思つて毎日毎日がんばりました。

二か月ぐらいたった頃、私は発疹チフスにかかりました。毎日四十度の高熱で、何もわからなくなつてしまいました、この時、赤ん坊の欣也は死にました。そして、三人の子供もチフスがうつつて、アンペラの上で寝ています。本当に哀れでした。欣也は四か月と十日ぐらゐの短い生命でした。死んだ時に、髪の毛と爪を少し切つて大事にしまつておきました。

五月の半ばごろ、やっと私の体も回復してきました、少しづつ起きて栄養をとるように心がけて暮しました。どんなことがあつても、日本に帰るまでは、といつも思つていました。

八月の半ば頃に待ちに待った引揚げ命令がきたのです。收容所の人たちもみんな飛びあがつて喜びました。チフスも直つていた。病氣中だったら帰れなかつたと思ひます。出発は昭和二十一年八月二四日でした。一

人千円しか日本に持ちかえられません、私はお金は無いし、子供のない人が私の子供達にお金をくださいました。十二年住んだハルビン市をあとに、出発直前に光昭がいなくなつて大騒ぎしました、あちこち探してやっと見つかり、ホッとしました、あのときもし見つからなかったら、中国孤児として、今頃親子の対面に來るのではなかったかと思ひます。

私達は、石炭を運ぶ貨物列車に乗せられ、午前十一時、ハルビンから南へ南へと走りました。途中ソ連軍に線路をこわされている所を三キロ近く歩きました、夜中です、私は自分のリュックの上に昭洋を乗せてお湯をもち、二人の子供の手を引いて一生懸命歩きました。ところが光昭がヘルニアがあるので熱をだして座ってしまつた。雨は降るし光昭だけ置いていくこともできない、母子四人で座つてしまいました、とに角、夜が明けるのを待つより仕方がなかつた。しばらくして隊長さんが私達を探しにきてくださったのです、隊長さんは光昭をおんぶしてくださいました、ほんとうに助かりました。

九月半ばに新京を發つて、途中、糠来省というところに川があつてそれを歩いて渡り、川岸についたとたんに子供達の靴はなく、はだしでした。

九月二十日頃、奉天からコロ島の港で全員大きな船に乗り、十月八日博多港に着きました、なつかしい生まれ故郷熊本へ。

ハルビンで死んだ欣也と亡夫の供養になると思ひ、この体験記の一部としました。

## 激動に生きて

神奈川県 北澤 治雄

昭和八年二月、国学院卒業を前にして満州国大同学院の入学試験に合格した。

長男の私が満州に渡ることは、母はひどく反対したが、父は、死ぬ奴は東京の真中にいても死ぬ時は死ぬ、と言つて許してくれた。弟を失つたばかりの父にしては、相当の英断だつた、と人の親になつてみて思うこ